
雪影

如月奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪影

【Nコード】

N6442X

【作者名】

如月奏

【あらすじ】

雪の降る季節が終わり、また春が巡ってきた。しかし、今年で高校二年になる阿宮恵一は、今まで通りの平穏な生活が続けばそれでよいという、向上心の欠片もないことを思っていた。そんな中、校門の前でうろうろしている見慣れない女子生徒と出会って……。

プロローグ

外に出るのも億劫になるほど北風が強く、雪が冷たかった日々と比べれば、少しばかり日差しも暖かくなっており、ようやくと新しい季節が巡ってきたのだということを実感させてくれる四月。俺は進級して高校二年になっていた。

担任、小嶋先生の雑談が、退屈なことこの上ないのは昨年度と全く同じであったし、クラスのメンバーもろくに変わっていない。何か大きな変化があるわけでもなかった。今まで通りであったのだ。

そんなわけだから、勉強に勤しもうとか帰宅部員から脱しようとかそういう向上心も芽生えるはずもない。ホームルームが終わればさっさと帰ってベッドの上に横になるうという残念な思考回路が組み替えられずに、そのまま機能しているわけだ。今日だってそうしたいという気持ちが相当程度あるわけだが、

「もう少し待ってねー」

という家庭科部部长にして唯一の部員、大島美里の嬌声がそれを阻止する。

「全く……なんで俺がお前の書類整理に付き合わないといけないんだ。だって……クラスで暇そうな人といえば、恵くんしか思いつかなかったんだもん」

満月のように丸い瞳でじっと見つめながら言う美里。率直に言うと、美里はクラスではひとときわ目立つかわい子なのだが、昨年同じクラスになった際に、席が近かったからという理由で無駄に親切にってしまったのがためか、妙に俺を頼るようになってしまった。

「やれやれ、今ここに残っているやつらはみな暇人だろ」

俺は廊下側の机にうつぶせになっている生徒数名を指差して言った。

「あの人たちはやり残しの課題をやっているみたいだから」

どう見てもそうは思えないがな。

「じゃあ……同じクラスの奴じゃなければ、いろいろ他にもいるだろ。例えば美来とか美来とか美来とか」

「お姉ちゃんは今部活だから！」

「じゃあ、小嶋先生は？」

「まさか」

「志島」

「論外」

とこのような具合に、どうしても俺でないといけならしい。いい迷惑だが、「論外」のグループに分類されるよりはましかと思うと、付き合っただけの気にはなれる。

「それで、俺は何をすればいいんだ」

「えっとね……書類が書き終わったら、生徒会室までついてきてほしいの。今年度の生徒会長さん、何だかちよつと苦手なタイプで……」

要件があまりにもちつぱけすぎるのだが……。美里じゃなかったら、自分で行けと言っているところだ。

「それより、お前が座っている席、誰の席だ？ 名簿の名前も見覚えがなかったし……ダブった奴か？」

「え？ 聞いてなかったの……というのも愚問かな。転校生が来るんだよ。明日」

美里は小馬鹿にしたように言った。ああ、愚問だ。ホームルームの話など、ぐっすり眠って聞き逃していたさ。

「ふうん……それなら明日、席を勝手に使ってごめんなさいと謝っておけよ」

俺は冗談めかして言った。すると、美里はバカ正直にも、

「うん、分かった」

と頷いて笑う。本当にやりそうで怖いけど、面白いのでそのままにしておこう。

「書類できたー。それじゃ、生徒会室までついて来て」

「はいはい」

それにしても、転校生か……。そういえば小さい頃、誰か忘れたが、転校してこの街を去っていった奴がいたような気がするな。いや、気のせいか……。

第1話 校門前にて

美里に付き添った後はさっさと帰宅して寝た。そして翌朝、俺はいつも通りの時間に出発し、のんびりと学校まで歩いていく。

俺の高校は自宅から徒歩圏内にある。そんなに歩く必要があるわけでもなくて、自宅を八時に出れば始業時刻まで余裕をもって到着できるほどである。

しかし、時間に余裕があると分かれると、人間というものはどうしても時間にルーズになってしまうものではなからうか。少なくとも俺の場合はそうである。だから、最高の立地条件であるにもかかわらず、俺の登校はいつも時間ぎりぎりになってしまっている。ただ、予め断っておくが、俺は今まで遅刻したことが一度もない。あくまで到着が遅いというだけだ。

そんなわけで、今日もいつも通りの時間に校門前に到着したわけである。この時刻になると、校門前には教師も生徒もいないのが常なのだが、今日は珍しいことに、一人の女子生徒が立っていた。制服は俺たちの高校と同じで、背丈は俺より十センチほど低く、髪は黒のショートで、癖毛なのか一本だけ後頭部にピンと跳ねているのが特徴的だ。やや色白で端麗な顔立ちをしているが、ヴィーナスで喩えるにはいささか浴衣が似合いすぎる。

胸元のリボンが青なので、どうやら俺たちと同年らしいが、俺は彼女と出会ったことはなかったように思われる。彼女も俺のことは知らないだろう。

「あ……」

彼女は俺の姿に気付くと、鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべて声を漏らした。一陣の風が少女の前髪を微かに揺らす。

「よっ、おはよう」

俺は躊躇なく挨拶した。すると、彼女も我に返ったように

「は、はいっ……」

と言ってから挨拶を返す。どこか戸惑っているような様子が手に取るように分かるのだが、初対面ならそれも致し方のないことだろうか。

「どうかしたか？ 遅刻すれすれの登校なんて、いやに墮落的だな」それを言うなら自分も墮落的な人間なわけだが、気にしたら負けだ。

「そ、それは……その……」

彼女は胸の前で人差し指同士を邂逅させながら口ごもった。

「訳ありか？」

「えっと……た、大した訳でもないのですが……」

何かを言いかけて彼女の頬がリンゴのように赤らんだ。

「……ごめんなさい！ 何でもありません！ 忘れてください！」

言いたくない理由らしく、目を閉じてやや強い口調で言うと、そのまま校門をくぐって走って行ってしまった。よく分からないが、とりあえず変わった奴だということ片付けておこう。

「……やば……」

腕時計を確認すると、俺も急いで教室に向かった。

第2話 転校生の少女

階段を駆け上っている最中にチャイムが鳴ってしまった。遅刻確定だが、それでも急ぐに越したことはない。褒められた行為ではないが、チーターのごとく廊下を走り、一組の教室の扉を勢いよく開いた。

「先生はまだだよー」

眼中に最初に入ってきた生徒、美里がプリントを配りながら能天気な声で言うので、一気に気合が抜けていくのが身にしてみ分かった。こういう時、漫画家なら俺がその場でへなへなと崩れ落ちていく様を描くのだろう。現実でそのようなことをする人を見たことはないが。

「おはよう。それにしても妙に騒がしいな。どうかしたか？」

元から騒がしいクラスではあったが、今日はいつもよりも話し声が多いので、少し尋ねてみた。すると、美里は軽いため息をついて

「はあ……恵くんは自分に関係ないと思ったことはすぐに忘れちゃうよね。転校生が来るんだって！ ほら、昨日話したでしょ」

と言った。

「そついえばそうだったな……」

俺は適当に返事をする、席について鞆の荷物を机の中に放り込んだ。

すると、美里はプリントを俺の机上に置きながら

「どんな子かな？ 名簿からするに、女の子みたいだよね……」

と聞いた。俺はプリントを見ながら

「俺は別にどんなやつでもいいけどな。それより……入学式も近いけど、新歓の準備とかどうだ？」

と聞き返す。美里は向日葵のような明るい笑顔を浮かべて

「うん、いい感じだよ。目指すは百人！」

と言った。

「百人はさすがにも無理だろ。どこぞのだんごでもあるまいし」

「気持ちだけ！ あっ、そうだ。明日の放課後ね、もし暇があったら家庭科室に来て。最近はずよココロネに挑戦してるの。味見して！」

あまりにも嬉しそうに言うので

「毒見の間違いか？」

と冗談をぶつけてみた。

「ひどいっ！」

言うまでもない返答で、美里はぷいと横を向いてしまった。しかし、

「まあ、行ってやるよ。美里の料理なら、安心して食べる」

と言ってやると、打って変わって

「ホント？ ありがとう！」

と満面の笑みを浮かべながら言うのだから、本当に分かりやすい性格である。なお、先ほどのお世辞っぽく聞こえる言い分は断じてお世辞ではない。美里の料理は一味する価値が十分にあるのだ。口にした新入生は、次の瞬間には家庭科部の入部届を出しているだろうな。

「ところで、何故にチヨココロネ？」

「うーんと……なんとなく……かな？ あっ、先生来たから」

美里は子猫のように小走りで自分の席まで戻っていった。それとほぼ同時に、教室の扉が開く。担任のお出ましだ。

「さて、それでは、今日は転校生を紹介するぞ」

教卓の上に、乱暴に名簿を置くと、廊下側に向かって手招きをする。クラス一同の視線が、入室してくる人物に集中した。これまで騒がしかったのが嘘のように。

入室と同時に、俺とその人物の目がピッタリ合う。その人物……いや、「彼女」は今朝出会った時と同じように、目を丸くして少し立ち止まった。俺はというと……啞然とするしかなかった。

第3話 イントロダクション

彼女が入り口で固まっているので、小嶋先生は困り果てたような表情を浮かべており、クラスの者たちも頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。

「おーい」

先生が呆れたように言うと、

「はっ、はい。すみません……」

と言って慌てながら、彼女は教卓のところまで歩いていく。ここで教室がまた騒がしくなった。特に男子の声がうるさいのは気のせいだろうか。

しかし、先生は珍しく注意一つせずに、白のチョークを手にして黒板に文字を書く。いつものミミズの這うような字とは違って、妙に丁寧だ。授業中もこれぐらいの字で書いてほしいものだ。

「昨日言ったように、今日からこのクラスと一緒に学ぶことになる磯原潮莉さんだ。それでは自己紹介を頼もう」

先生に言われて、潮莉は丁寧にも一度お辞儀した後、話を始めた。あまり大きな声ではなかったので、クラス一同だんまりになって彼女の言葉に傾聴する。

「名前は先程小嶋先生に紹介していただいた通りです。都内の高校から転校してきました。まだこちらのこと……」

潮莉は言いかけて口をつぐんだ。そして、俺の方をちらりと見て軽く目を閉じると、

「……はい、正直言ってよく分かりません。ご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、よろしくお願いします」

と一気に言い切ると、もう一度お辞儀した。東京か……随分と遠いところから引っ越してきたものだ。それにしても、妙に俺を気にしている。そんなに俺がこのクラスにいたのが意外だったか。

「席は阿宮恵……窓際のスポーツ刈りで目つきの悪い奴の後ろだ。」

そこ空いてるだろ」

先生は何のためらいもなく言った。酷い。誇張表現にもほどがある。俺より目つきの悪い奴は、このクラスなら何人もいるぞ。それに、窓際の席で男子は俺しかない。言いたかったただけだな。

「……はい」

しかし、彼女は否定することもなく頷くと、そのまま指定された席まで歩いていく。そして、俺の席の隣で立ち止まると、小鳥のさえずりよりも小さな声で、

「……初めまして……ではありませんね。数分ぶりです。これからもよろしく願います」

と囁いた。仮初めにも顔を知った人物がクラスにいたことに対してかは知らないが、潮莉は安堵の表情を浮かべている。

「あ、ああ……よろしく」

そう返すと、彼女はこくりと頷いて、自席に座った。彼女の荷物を弄う音が聞こえる中、小嶋先生の話は続いていく。窓の外を見ると、少し雲行きが悪くなっていた。そういえば、天気予報で雨が降ると言っていたか。

第3話 イントロダクション（後書き）

・登場人物の名前の由来

大島美里：「美」 女の子らしい美しさ

「里」 故郷を愛する優しさ・故郷を忘れないでほしい

裏事情：没作キャラの名前

大島美来：「美」 女の子らしい美しさ

「来」 好機が来ますように

「みらい」 未来へ向かう前向きさ

裏事情：没作キャラの名前

磯原潮莉：「潮」 広い心に”満” ちた・愛嬌・??????

「莉」 茉莉花のような愛らしさ

裏事情：一青窈の「栞」（読み）・某所の地名（潮の字）

阿宮恵一：「恵」 大地の恵み・幸せになりますように

「一」 まっすぐな強い心・心変わりしない

裏事情：「一」の使用が前提

第4話 群れる生徒たち

ところで、転校生が来たとなると、妙にはしゃぎだす生徒がいるというのは、いつの時代でもどこの世界でも変わらないことなのであるうか。まさかそんなことはあるまい。

「ねえ、好きな食べ物はなに？」

「こっちの気候はどう？」

「運動は得意？」

「今度デートしようぜ」

「結婚してください！」

一部変な輩が混じっているが、そんなことはどうでもよい。とにかくうるさい。今日は、休み時間と授業中との温度差がありすぎて困るほどだった。そして、放課後もこの有様だ。

「恵一ー、お前も何か話せよー。せっかく席が近いんだしさ」

中学からの悪友、志島和希が軽い口調で話しかけてきた。俺と同じスポーツ刈りだが、こいつの方は結構な癖毛で、今もところどころサボテンの針のようにツンツンしているという特徴がある。ある意味、そういうのがなければ、普通の男子生徒が髪型だけで個性を出すのは難しいとも思っただが。

「興味ない」

俺は無愛想に返す。その、席が近いゆえに迷惑しているのだしな。「全く……そんなだから落ちこぼれるんだぞ」

「お前の方がひどいだろ。それに一人の女子生徒に話しかけるか否かが学績に関係するなど初耳だな。参考資料を挙げてみる」

「知るか」

俺の冗談に対し、志島はつまらなそうな表情を浮かべながら言った。

「……それよりお前こそ何か話さないのか？ ああ、なるほど。お前自身が参考資料だったか」

「うるさい！ 待っているんだよ。他の奴らがどこかに行くまで。大人数で押しかけても疲れさせるだけだろ」

慌てて言う彼の言葉に、俺はにやりとした。そして、

「ほう、それでその疲れたところに追い打ちをかけるわけか」と言った。

「こいつむかつく！」

握り拳を作りながら、乱暴に言う志島。少々からかいすぎたか。

まあ、謝る気は寸分もないがな。

「あー、そんなに言うなら、今から話しかけるぞ！ 俺が参考資料程度ではないことを証明してやる！」

そう言い、志島は渡り鳥のように群れる生徒たちを押しつけて行くとした。しかし、その生徒たちに追い出され、俺の目の前で尻餅をつくのであった。

「やはり参考資料程度でしかなかったわけだ」

「やっぱりこいつむかつく！」

結局生徒たちの群れが潮莉の前から姿を消すまで、あと十五分も待たねばならなかった。それまで志島が暇そうな表情を浮かべながら、指で器用にシャーペンを回していたのは言うまでもない。

第5話 サボリ部員

質問攻めの後で、少々お疲れ気味の潮莉。それにも躊躇なく、志島は話しかけた。

「おーっす」

随分と軽い奴だなと思われたことだろう。潮莉も首を傾げていたが、

「えっと……こんにちは……」

と苦笑しながら返した。

「俺は志島和希。そんでもってこいつが、無愛想なことでも有名な阿宮恵一だけ」

志島は俺の肩を持ちながら言う。

「おい、俺は別に……」

と言いかけたが、

「和希さんに……恵一さんですね。こちらは磯原潮莉です。よろしくお願いします」

とあまりに丁寧にお辞儀して言うので、俺は口ごもってしまった。微笑むその表情は、実に清々しい。

「俺らのクラスはいつもこうなんだよ。最初のうちはちょっと疲れながらもしれないけど、ぼちぼち慣れていったらいいぜ」

志島が言うと、潮莉は小さく頷いた。少し戸惑っているのか恥ずかしがっているのかよく分からないが。

「……という前置きはさておき、しおりんって結構めんこいよな。転校する前もモテたんじゃねえの？」

と言う志島を前に、潮莉は頬を赤くした。

やれやれと思いつながら、俺は志島を小突いてやる。すると、志島は頭を押さえながら、俺を睨んだ。

「いてえ！ 何で叩くんだよ！」

「お前が勝手に変なニツクネームをつけるからだ。それに、叩いた

んじゃない。小突いただけだ」

「俺が痛いと感じたら、それは叩くという行為に分類されるんだよ！」

志島は俺の襟ぐりを掴みながら迫ってきた。不意に横を見ると、潮莉が何か言いたそうな表情をして、俺の顔を見つめている。

「どうかしたか？」

俺が聞くと一言。

「いえ……ただ、その……仲がいいんですね」

俺と志島は互いの顔を見合わせた。

「まさか！ 油と水ぐらいに仲が悪いから！」

「そんなことはねえよ。水と油ぐらいに仲が悪いぜ」

ほぼ同時だった。わずかに志島の方が早かったような気がするが、陸上競技のゴールの着順ぐらいに微妙な差だと思う。

すると、潮莉は口元に手を当てながら、必死で笑いを堪えていた。

「やっぱり……仲いいですね……」

彼女の言葉を聞いて、俺は落ち着いてもう一度志島の顔を見た。

志島もまた、俺の顔を見ていた。

「……そうかも……しれないな」

「……まあ、しおりんがそう言うなら、そういうことにしておくか」
俺たちも笑った。

すると、教室の扉が勢いよく開き、ジャージ姿のツインテール少女が君臨する。背景に地獄絵のごとく紅蓮の炎が燃え盛っているような気さえた。

「和希ー！ あんたねえ、やっぱり教室で油売っていたわね！ さつさと来なさいよ」

彼女は強い口調で言った。志島は大慌てで潮莉の後ろに隠れるが、構わずに俺たちの方に近づいてくる。

「……あんた、名前は？」

彼女は潮莉を指差して言った。

「ひえ？」

青ざめたような表情を浮かべる潮莉。まあ、開口一番にこれでは無理もない。実際に俺もそうだったからな。

「名前がないと呼べないでしょ。ほら」

「えっと……潮莉……です。磯原潮莉」

蚊の鳴くような声で潮莉が言っていると、ツインテ少女は少しだけ表情を和らげて笑った。

「そう、いい名前ね。それじゃ、潮莉ちゃん。そこをどいて。あたしはこの和希に用があるの」

「え？」

潮莉がちらりと和希の方を見た。和希は全力で首を振っている。

このままでは埒が明かないと悟った俺は、潮莉の耳元でこう囁いてやった。

「陸上競技部屈指のサボリ部員、志島和希を庇ったところで、何の利もないぞ」

「えっ……そんなサボリなんですか？」

「ああ、実際に昨日も一昨日も無断で不参加。……あと、大島美来って名前なだけだな、こいつが怒るのも無理はないってわけ」

「そ………そうですね………」

潮莉は小さく頷いて椅子から立ち上がると、子犬のように軽快に俺のそばに移動した。志島は口をあんどくり開けて、ただただ美来を見つめている。自業自得だ。

「………さあ、来なさい」

「くっ………恵一………俺はここまでだ。………どうかこの剣であのメデューサを断ち切ってくれ………」

俺の方を向いて、上手さのかけらもない演技をする志島。もちろん俺は

「嫌」

と即答。というか、メデューサってどうせ美来のことだろうが、火に油を注ぐような真似は控えた方がいい。

「はあ………石化したいのなら、いつでも石化させてあげるから、と

りあえずこつちに来なさい。もうすぐ新歓なのよ。あんたもちゃんと部活に出てかっこいいところ見せなさい」

美来は呆れ気味に言った。すると、志島もしぶしぶ彼女のほうに歩いて行く。

「くそっ……」

まだ嫌そうな表情を浮かべていたが、媚を売るような甘い口調で「……あんたがかっこいいところ見せたら、一年の女子も十人ぐらい入部してくれるわよー」

と美来が言うと、一瞬で表情を明るくし、

「何だと！ こうはしてられないぜ！」

と言い、美来を置いて猛ダッシュで教室から出て行った。

「ホント単純ね……。まあ、潮莉ちゃんもあいつには惚れない方がいいわ。うーん……悪い奴じゃないんだけどね、結構苦労はさせられると思うから。それじゃ」

美来もそう早口で言うと、志島を追っていった。まだポカンとしている潮莉に、俺は声をかけた。

「はは、ちょっとびっくりしただろ」

「はい……でも……なんとなくですけど、いい人そうでした」

戸惑いながらも言う潮莉。

「否定はしないな」

俺はそう言って鞆を持ち、ゆっくり席から立ち上がった。

「どちらへ？」

「帰る。それだけだ」

第6話 ハズレルート

教室を後にしようとしたが、

「……恵一さん」

と俺を呼ぶ潮莉の声を聞いて、振り返った。彼女もまた、手に自分の鞆を持っていた。

「なんだ？」

と聞くと、

「あの……」

潮莉は一呼吸置いて

「恵一さんは部活とかはやっていないのですか？」
と尋ねた。

俺はしばらく黙り込んでしまったが、

「ああ、やっていない」

とだけ答えた。すると、潮莉は口元に軽く手を当てて、

「ちよっぴり……残念です」

と一言。俺は彼女が何を言いたいのがよく分からなかったが、いやにしょぼくれた顔をしていたので、こう言っちゃった。

「まあ、どうせ暇だし、校内の案内でもしてやるつか？」

「いいん……ですか……？」

胸元に手を当てて、遠慮がちに言う潮莉。

「もちろんだ。……あ、あーと……そういうえば、美里の奴、今日の放課後に来てほしいとか言っていたな」

「美里さん……同じクラスの人ですよ。今朝のホームルームの後すぐに話しかけに来てくれました」

潮莉は微笑んで言った。まあ、ホームルーム直後、俺は机にうつ伏して、睡眠学習を開始する準備をしていたから、何も聞いていなかったが、既に会話済みだったのか。

「それで、何か謝っていらっしやったのですが……よく分からなか

ったです」

マジで謝っていたのかよ。

「そ、そうか。それなら話は早い。そいつは家庭科部なんだが、コッペパンの試食をしてほしいらしい」

「コッペパン……ですか？ ……といいますが、そんな大事な約束、忘れちゃだめですよ！」

潮莉は顔を赤くして強い口調で言う。そんなに大事なことか？

と内心思いつつも、俺は彼女の頭を撫でながら、

「はは、そうだな。悪かった」

と言った。しかし、全く悪びれていない風だったのが、余計に潮莉には不快だったらしい。

「待たせてはまずいです！ 早く行きましょう！」

と言い、俺の手を引っ張って教室を出ていき、そのまま階段を下りて行った。

「おいおい、家庭科室の場所、分かってるのかよ」

「分かりません」

おい、こら。

「でも、何となくこの棟の一階西隅にある可能性が高いと思います」「そうなのか？」

「そうです！」

残念ながらハズレだが、面白いのでそのまま付き合っただけでやることにする。

「ところで恵一さん。美里さんと美来さんってもしかして……」

「ややしんどそうな口調で、しかし、走る速度を緩めることなくいう潮莉。」

「今更気づいたか？ しかも、双子だぞ。美里が妹で美来が姉。性格は正反対だがな」

俺も我ながら律儀すぎるとは思うが、返してやる。

「……羨ましいです。わたしもお姉ちゃんがいてほしかったです……」

……」

急に立ち止まって、噛み締めるように言う潮莉。俺も合わせるように足を止めた。

「……もし生まれ変わることができればなら……わたしはお姉ちゃんがこの世界にいる未来を望みたい……です……」

潮莉は窓の外を見つめている。その先には、黒雲と黒雲の間に隠れかけている太陽が、弱い輝きを放っているのが見えた。

「……恵一さんは、何を望みますか？」

潮莉は俺に聞く。何とも言えない雰囲気、俺は話を振られないといいなと思っていたのだが……。

「……そうだな……」

思索する俺を真剣な眼差しで見つめる潮莉。俺は一気に言い切った。

「俺は何も望まないな」

「……それが……最高の答えですね……」

潮莉は小さく頷いて、にっこり笑う。適当に言ったただけだが、潮莉には満足だったらしい。

「行きましようか」

「そうだな」

俺たちはまた走り出した。そういえば、今向かっている先は家庭科室とは全く別物の教室だったな。こいつの反応が楽しみだ。

第7話 ばらまいてしまった

「はあはあ……」

息切れしながらもようやく辿り着いた「一階西隅」が第一化学室であつたという事実を知って、潮莉はどう思ったことだろうか。

「……外しました……」

異臭の漂う教室の前で肩を落としていた。……と、ちょっと待て！ なぜ異臭が漂っている！？

「どうかしましたか？」

「いや、どこからどう見ても、この臭いは異常だろ。分からないか、潮莉？」

俺は慌てて言うが、潮莉はただ首を傾げているだけだった。

「化学室というのは、こういうものではないのですか？」

「……お前の前の高校の化学室を覗いてみたいよ」

「覗き見は駄目です！ 女の子に嫌われますよ！」

冗談かどうかは知らないが、また顔を赤くして怒る潮莉。少なくとも俺には、お前の考えているような最悪な行為をする意図は全くない。志島なら分からないが。

「やれやれ……それじゃ、今ここに漂っている臭いが何によるものか、二十五文字以内で説明してくれ」

俺はため息をついて言った。すると、潮莉は小さく頷くと、

「中で実験中らしいが、失敗した模様」

「ですます調がこいつのデフォではなかったのか？」

「……」

俺の疑問を含めた視線にもかかわらず、潮莉はもの一つ言わない。目を逸らすこともしないのだ。

「……どうした？ 口調がおかしいぞ」

「以上」

「はい？」

「……さっきので、漢字に直さずとも字数制限は満たされるはず」
なるほど、ですます調ではなかったのは、字数稼ぎのためだったか。いや、そんなことはどうでもいい。

「律儀に従ってるんじゃないやねえ！ 字数制限なんかどうでもいいんだよ！」

「ダメです！ 字数制限は守らないと、零点になってしまいます！」
試験の話有谁がした！

しかしまあ、とりあえず、こいつは変わった奴だということを確認することはできたわけだ。いや、無駄に真面目な奴という方が正確だろうか。

そんなことを思索していると、部屋の扉ががらりと音を立てて開いた。そこには盛大に咳き込む女子生徒の姿があった。

背丈はたぶん潮莉と同じくらい。髪型は左サイドテールで、やや垂れ目なのが特徴か。あと、目には黒縁の眼鏡をしている。

しかし、ぼろぼろになった制服は何ともいえない不気味さを放っている。どんな美形な人も、白骨化したら不気味ではないか。実際に、浅間山の噴火で石段が埋まった観音堂で発掘された白骨死体も、実は女性で、なかなかの美女であったというが、あのさまであった。それと同じだ。

「……ごほんごほん……大失敗をしてしまった」
「だ、大丈夫ですか？」

潮莉が不安げな表情で、その女子の顔を覗き込む。

「……大丈夫だ。問題ない。それより、君は誰？」

「わたし……ですか？ わたしは磯原潮莉です。今年度からの転校生です」

顎に手を当てて、潮莉の顔を見ると、何かを理解したかのように深く頷くと、

「ぼくは新島静美という。下の名は静内の『静』に美瑛の『美』だ。化学部の部長をしている」

と言った。「静」の名前の割には、ぶっ飛んだことをやらかしているようだ……。

「……北海道の出身ですか？」

「察しがいいな」

自己紹介に北海道の地名を使ったら、誰でも勘付くだろうよ。というか、潮莉ももつとほかに聞くべきことがあると思うのだが。

「ぼくは四年前に北海道から引越してきたんだ。そして、それから四年間、ずっと化学部に所属して実験に徹してきた」

「すごい……ですね……」

潮莉はいやに感動しているのだが、俺は北極と南極がポジションチェンジでもしない限りは感動できなかった。実際にこの悪臭は、その実験によつて生み出されているものだからな。

「ぼくのすごさを分かってくれるとは、実に嬉しいことだ。感謝する」

静美はさぞかし感慨深そうに言うと、今度は俺の方を見た。

「君は？」

「俺か。俺は阿宮恵一。それより、この臭いはなんだよ」

静美は眼鏡を外すと、

「なんのことだい？ どこから臭いが漂ってきているんだい」

お前の服からもな。

「……………わ、わたしもそれは思いました……………」

言いにくそうに潮莉が言うと、静美は

「そうだな……………ぼくも分かっているさ。先ほどの失敗のせいだね。

おかげで、試験管を一本ダメにしてしまった」

と言うのだ。素の表情のまま。

「おいおい、弁償しなくていいのかよ」

というか、一本で済んだのか、本当に。

「弁償？ ああ、それなら大丈夫だ。問題ない」

静美はなんの悪びれもなさそうに言うと、懐から札束を取り出し、床の上にばらまいた。ぱつと見た限りでは数十枚ある。

「おっと、ばらまいてしまった。どうしようか……」

「あ、え、え、えー！」

潮莉は狼狽する。当然だろう。俺もそうなのだから。

「……さて、ぼくは先生を呼んでくるよ。君たちはややこしいことに関わりたくなければ、その札束を持って退散するんだ」

静美はそう言い捨て、走って行ってしまった。

「……これ、おもちゃの札束ですね」

潮莉は札束の内の一枚を拾い上げて言った。

「どれどれ……本当だな……」

確かに普通の紙幣よりも厚く、そして、小さかった。なにより、本来ならば「日本銀行」と書かれているべきところが「日本子供銀行」となっている。

安堵したのか、潮莉は軽くため息をつく。

「はあ……無駄に神経使いました……。……それより、なんで家庭科室まで行くだけなのに、こんな道草をしているのでしょうか……」

「それはお前のせいだ」

「そうでした……。ごめんなさい。やっぱり最初から案内してもらえばよかったです」

潮莉はしゅんとした。

「そうせずに楽しんでいた俺も悪いけどな」

慰めにもならないだろうが、とりあえず言ってみる。まあ、実際には楽しむどころか、どっと疲れが溜まったのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6442x/>

雪影

2011年10月22日02時13分発行